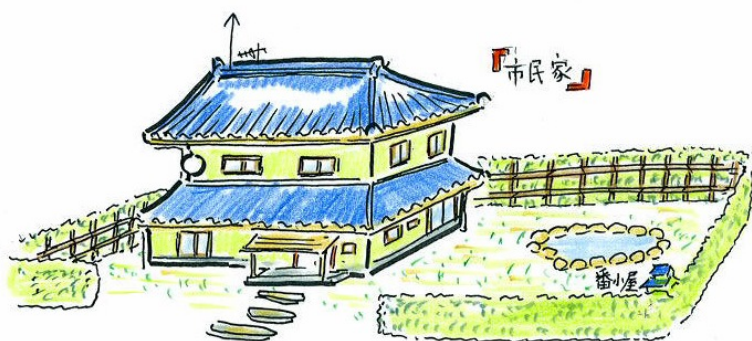


★★ 支援くんの火災予防奮闘記 ★★ これまでのあらすじ

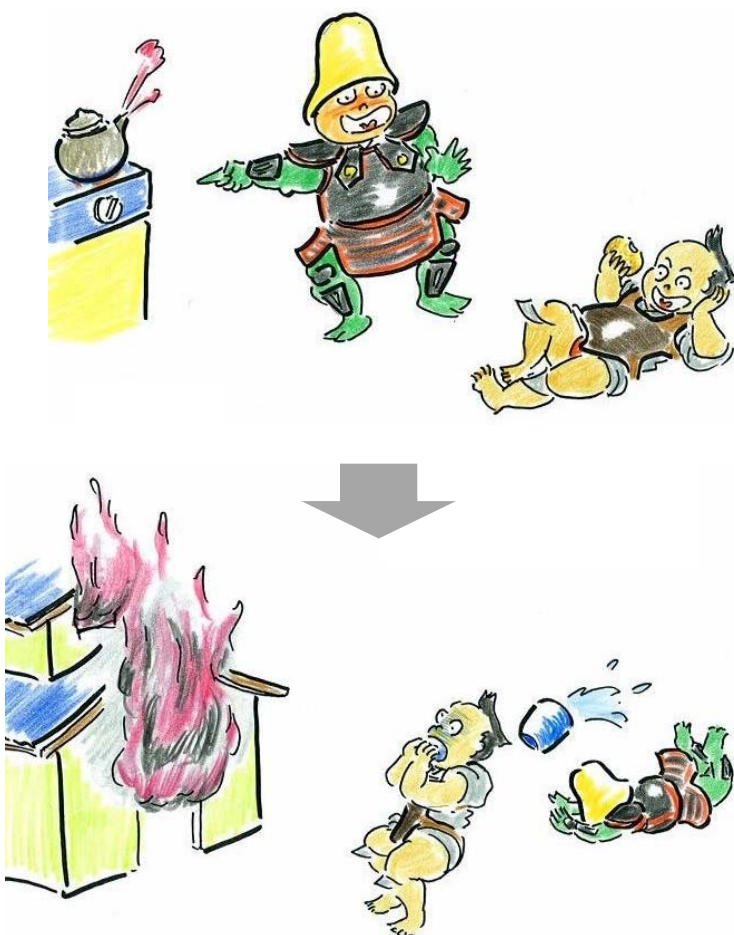
物語を読む前にまずご覧ください。



物語の主人公 支援くんは「市民家」の火災予防を司る妖精です。



家来の^{ちゅうげん}中間 ご助と火災予防の点検を行うのですが、まじめな支援くん比べ、あまり仕事に熱心じゃないご助の点検はいつも問題ばかりで、時に大きな事故まで起きてしまいます。



そんなご助に手を焼きながら、火災の予防を行う支援くんたちの姿は、普通の人には見えない筈なのですが、今年5歳になる市民家の長女 援ちゃん^{えん}には何故か二人の姿が見えるようになったのでした。

てんとく
点得幼稚園の年中さんの援ちゃんは、二人と遊ぶのがだぁーい好き。

でも、援ちゃんの好奇心が大きな事件を引き起こすこともあります。



ご助と援ちゃんに振り回され、苦勞の絶えない支援くんの

火災予防奮闘記 をどうぞご覧ください。

支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.47

(♪：クシコスの郵便馬車) パパパーン パパパーン パパパパパーン

パン パパパンパン パンパンパーン パンパン パンパン パンパン パパ

パーン・・・と姫様が口ずさむ、運動会定番のマーチに続いて、

「最初は10m競争。選手は、スタート位置に並んでください。優勝賞品はバナナです！」という姫様のアナウンスが



そのアナウンスに導かれるように、拙者のご助は下馬の広見に設けられた特設コースのスタート位置へと向かったのじゃった。

今日、10月の第一土曜日は一年に一度の運動会じゃ。

一昨年から姫様の意向で石引二丁目、下馬の広見で徒競走や綱引きなどを行い、豪華賞品を懸けた闘いが行われておるのじゃ。



額の赤色の鉢巻きを、キリリと締めなおした拙者は

「ご助、今日こそは拙者が勝たせてもらおうぞ。」と意気込んだのじゃが、一方のご助は

「ふあああ一旦那樣、止めやしょうや。折角の休みだというのに何が悲しゅうて朝っぱらから駆けっこせにやならんのだす？」と、スタート位置に寝そべり、尻を掻きながら面倒臭そうに言うのじゃった。



見かねた拙者に

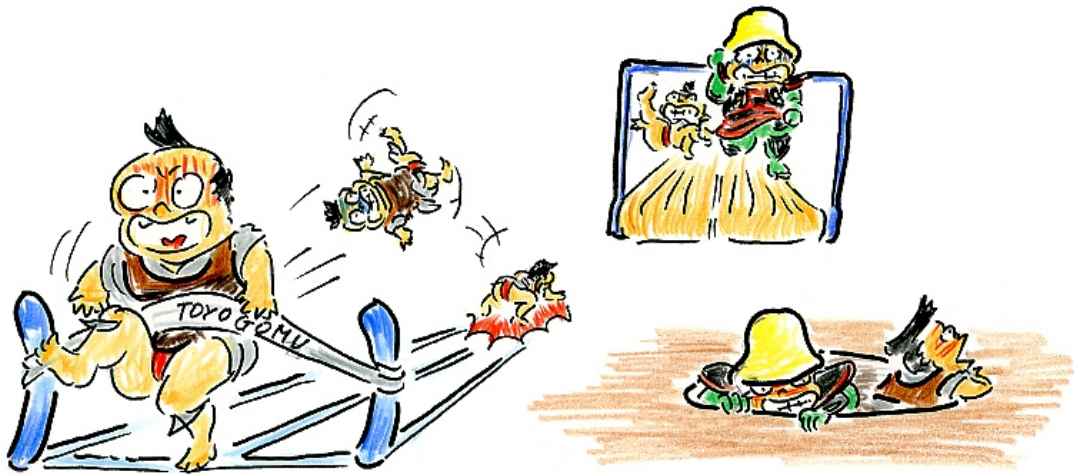
「こらご助、姫様はスターターを持って位置に着いておるぞ！早く立たんか！」と叱られ、やっとスタートラインに立ったご助じゃったが、、

「旦那様、いい加減目を覚まして下せえよ。あの姫様が本当にあっしらにバナナを下さると思ってるんでやすか？去年のことを覚えてるでやしよ？」と言うと、今度はスタート位置で胡坐をかくと拙者を見上げたのじゃった。



「ははは、確かに去年は姫様の落とし穴にやられたが今年は大丈夫じゃ。さつきコースの下見をしておいたからな。安心しろ。」と拙者が言う

「本当ですかい？その前の年はゴールテープがゴムバンドで、勝った筈のあっしはスタートラインまではじき返されちまったじゃねえですか！更にその前の年はコースの途中がランニングマシーンであっしも旦那様もゴールできなかったじゃねえですか！どだい姫様はあっしらにバナナを下さる気なんぞ、毛ほどもねええんですよ！」と力説するのじゃった。



「大丈夫じゃご助、儂も馬鹿ではないぞ、今度コースに悪戯したら来年から運動会は『致しません』と姫様に申したからな」と言うスタートラインに両手を着いたのじゃった。

「それで旦那様は姫様を信じたんですかい？あの姫様ですぜ！」とご助の素
っ頓狂な声に

「し、信じたわい！主様の姫様のお言葉を信じられんで如何する！」と答え
ると

ご助はというと、猜疑の細い眼を拙者に向けながら

「甘えなー・・・甘えーですって旦那様。まあ、旦那様がそうまで仰るなら
あっしは走りますがね。ケッ、どうなっても知りやせんぜ！」と捨て台詞を吐
きながら忌々しそうにスタートラインについたのじゃった。



「馬鹿め！コースに悪戯してないと仰るんだからあとは走るだけじゃ。今年こそ堀他のバナナは拙者が頂くわい！」と吐き捨てるのご助と共にクラウチングスタートの体制に

『テイク ユウア マアアク』

『シェット』 と姫様のたどたどしい合図で拙者は遥か10m先のゴールを臨むと

あとは、パーンというスタートの号砲を待つだけ・・・じゃったが号砲は鳴らず、代わりに『パチンツ』と軽い音が！

「ありえ？にやんで（何で）鳴らないの？」と姫様がスターターから飛び出した^{えんしょう}焰硝玉を拾い上げ、詰めなおしてから拙者達に向き直ると

「うん？ご助どうしたによ？」と足首を押さえずくまるご助に声を掛けられたのじゃった。

それにご助は

「き、汚ねえじゃねえですかい！あっしはスタートに懸けてんのにスカしやがるから、つんのめって足首を挫いちまったじゃねえですかい！」と悪態をついたご助じゃったが、姫は

「くるしゅうない。」と平然と答えるとスターターをご助の鼻先に向けると
引き金を・・・。



「ひいいい、な、何しやがるんでえ！」と叫ぶご助じゃったが、姫様が引き
金を引くと、またしても焰硝玉は受け金から飛び出し、『パチン』という軽い
音だけが残るのじゃった。

「な、なんでえ、おどかしっこなしですぜ。大体そんな大きなピストル玉なんて無いですぜ。そいつぁ、しけってやすぜ。」とご助は地面に転がった焰硝玉を手にとると

「御覧なせえ、水を吸ってこんなに丸く膨らんで。これじゃあいくら撃っても音は出やせんぜ。」と言うとご助は痛む足を引き摺りながら、丸く膨らんだ焰硝玉を地面に置くとサッカーボールのようにドリブルを始めたのじゃった。

そんなご助の姿を横目に見ながら

「のうのう、ちえん、どうしてにゃらないによ？」と姫様が泣き出したので

「姫様、あの焰硝玉はどこに仕舞われていたのです？」とお聞きすると

「仕舞ってないもん。天徳院の露店の横に落ちていたの。」と姫様。

「露店？ああ、確か昨日まで秋祭りの露店が出ておりましたな。で、どんな露店で？」と拙者がお聞きすると

「花火とか売ってたところ。」と姫様

「花火？・・・それじゃ、あの丸いのも花火なんですかい？」と聞くと

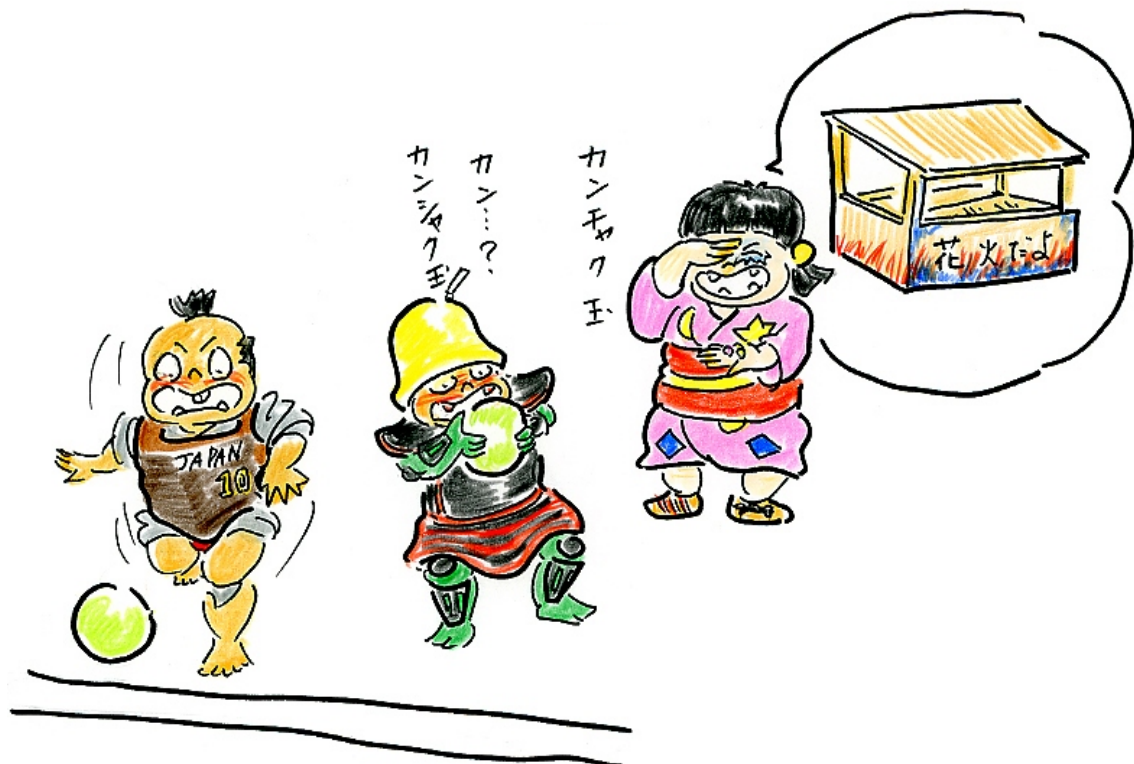
「ち（知）らない。みんなやカンチャク玉とか言ってたもん。」

「カンチャク玉？・・・カンチャク・・・か、癩癩玉だッ、危ない！ご助ッ、それは・・・」と拙者がご助に知らせようと振り向いたのじゃが、そこにご助の姿は無く、ご助ははるか先のゴール付近で、痛めた足を引き摺りながら癩癩玉を蹴っておった

「ご助えーッ、待てえー」と拙者はあらん限りの声でご助を制止したのじゃが

「へへへ、待ってたまるかいッ。今年こそバナナは頂きだあ。」と叫ぶとゴール手前で痛めた足とは逆の足を折りたたむと

「それえ、三苦のミドルシュートッ！」と渾身の力で癩癩玉を蹴り上げたのじゃった。



「ご助えっ、大丈夫か！」と駆け出した拙者の遙か頭上を

「クワッ、クワッ」と一羽のゴイサギが・・・いや、「クソガキーツ、クソ
ガキーがあ・・・」とゴイサギの鳴き声に似た悲鳴を上げながら、ご助がスタ
ート地点の方角へと飛び去って行ったのじゃった。



元のスタート地点まで飛ばされたご助に駆け寄った姫様が

「きゃー！ご助、楽しかったきゃ？カンチャク玉は、まだまだいっぱいあり
ゆちょ。えんちゃんもご助みたいに飛びちゃい！」とご助目掛けて癩癩玉を投げようとする姫様に

「ひいいい！クソガキ・・・いや、姫様ッ！癩癩玉はあぶねえ！」と叫ぶご
助の傍らにたどり着いた拙者も

「姫、お止めください！癩癩玉から出る火花で火事になったらどうす・・・」
と叫んだのじゃったがとき既に遅く

「ちよれッ」と姫様は足元の拙者達に癩癩玉を投げつけたのじゃった。



『ドドドー・・・ン』と大音響が、

「あちゅいッ」と姫様はご自分のおみ足を掌で押さえると

「熱ゅーい、ちえん！にやんでこんな危ないもの持たせるによよ！あれ？ち

えん、ご助、どこへ行ったの？ママあーっ、ちえんにご助がイジメるのお！」

とお屋敷の方へと駆け出したのじゃった。

拙者ですか？

拙者のご助はカンチャク玉の爆風で・・・ここですじゃ。ほれ、そこからお
空の上を・・・。

「クワッ、クワッ」と鳴きながら飛ぶゴイサギが見えますかの？

その隣・・・。

「クソガキィ！クソガキがー！」と叫んでおるのが見えますでっしゃろか？



皆々様よ、この際きっちりお伝えしやすが、瘤癪玉なんて代物をクソガキ
に・・・いや、お子様に与えてはなりませんぜ・・・ご助より。

(おしまい)